

考え、行動し、そして社会に働きかける。

日本の入試に照準を  
当てないIBコース  
だからできること

立命館宇治高等学校IBコースは、世界の大学への出願・入学資格を得られる国際バカロレア・プログラム（IBDP）に準じた全人教育を行っています。その中核をなすプログラムのひとつが「CAS（創造性・活動・奉仕）」。「奉仕」とはボランティア活動などを指し、IBDPでも利他の心が重視されていることが分かります。実際IBコースでは、生徒たちがどのような活動を行い、どんな学びを得ているのかを紹介します。



樋原ありすさんの活動



ワードとは、立命館宇治高校のIBコース独自の制度で、2年間のCAS活動とポートフォリオを教員が評価します。ありすさんは、書道部に属し、模擬国連に参加するなど、さまざまな活動を行ってきました。中には失敗したプロジェクトもありました。それらの2年間の活動と、その活動に対するリフレクション（省察）の深度から、大賞に選ばれたのです。帰国後、日本の教育に抱いた違和感から、ありすさんは、日本の教育を何とか変えていくことはできないかと考えています。「子供が好きなので、アメリカの大学で、ボランティアや幼児教育を学んで、日本に戻ってきたいです。今は、リベラルアーツを学べる少人数の大学を中心に、出願する大学を選んでいきます。カリキュラムを自分で組み立てられるので、幼児教育を中心に、例えばビジネスなどの授業も、幅広く受けてみたいと思っています。アメリカの大学は、社会との接点が多いので、理論だけを詰め込むのではなく、社会の中で実践的に学べるのがいいです」。

IBコース3年生の樋原ありすさんは、アメリカ、カナダから、8歳の時に日本に帰り、一般の小学校に転入しました。帰国子女は一般的に、日本の学校に行かず、インターナショナルスクールに通うケースが多いのですが、ありすさんの場合も、日本の学校に入ったものの、海外との落差を感じていたそうです。そこで、IBコースのある立命館宇治中学校・高校に入学しました。「CASでは、自分の好きなことや、今までやったことのないことにチャレンジしていきます。大学入試でアピールするためにするんじゃないんです。大きなプロジェクトでなくてもいいし、失敗してもいい。私も、スキーのトリップをしようと思いましたが、うまくプランできず断念しました。でも、それはそれでいいんです。日本人は成功した証を重視しますが、CASでは成功したかどうかではなく、そこから何を学べるかということが大切なので」とありすさんは話します。実はありすさんは、2015年度のCASワードで大賞を受賞しています。CASア

宝珠里さんの活動



里さんは笑います。「現在のところ、進学は日本の大学を考えています。日本で学んで、もし海外に行きたくなったら、留学しようと思っています。ただ、日本の大学に進学した時、周りが意見のない人たちばかりだったと思うと少し不安ですね。でも、ディスカッションをリードするスキルもここで学んできたので、みんなの役に立ちたいと思います。立命館宇治高校のIBコースには、自分のコンセプトを理解し、応援してくれる先生がいます。入試がゴールではないとわかっている先生方がいることは、心強いですね」。

宝珠里さんは将来を考え、IBコースの「学習者像」に共鳴して、立命館宇治中学校・高校を選択しました。「暗記中心の受験勉強をするのは時間の無駄でしょう？」と珠

里さんは笑います。IBコース2年生の宝珠里さんは、インターナショナルスクール出身。人前で話すのが好きで、現在は生徒会長をしています。「私は人前で話すのが好きなので、スピーチコンテストやプレゼンには積極的に出ています。賞をいただいたこともあります。審査員の方からも、人前で話す職業につきなさいと言われました。でももし、CASがなければ、このモチベーションも続かなかったかもしれません」という宝珠里さん。スピーチの持続的なテーマは、「日本の英語教育を変えたい」という思い。コンテストは、自分の意見を学校以外の一般の人にも聞いてもらえるチャンスだとと



CASでは失敗も大事な経験

CASの活動を進めるのは生徒自身です。例えば、宇治川の掃除をした時は、宇治市役所の方にスーパーバイザーになっていただきましたが、そのアポイントや相談もすべて、生徒たちで行いました。また、CASでは、失敗も大事な経験と考えています。成功させることが目的ではなく、活動のプロセスから何を学ぶか？ ですから、最も大切なプロセスはリフレクションです。クリティカルシンキングができていくか、そのチェックは私たちもやりますが、生徒自身が自分の「強み」を見つけたり、自己分析できたりすることに重きを置いています。



Mr. Kim Fong ONG  
立命館宇治高校 IB コース教諭  
CAS コーディネーター

日本の大学入試では、短時間のうちに正解を多く出せるかを試すテストで、一回勝負で高得点を得ることが要求されます。そのため、いい大学へ多くの生徒を入れようとする日本の一般の高校では、正解を暗記していく受験勉強に、教育が集約されてきました。一方、立命館宇治高校のIBコースでは、CASに象徴されるように、自発的に「探究学習」を組み立て、学びの手法も自ら切り開いていきます。通常の授業科目でもアクティブラーニングで、生徒が自らリサーチし、ディスカッションして学び、プレゼンする。文科省も次期学習指導要領でアクティブラーニングにかじを切った現在、立命館宇治高校のIBの試みが、日本の高校教育を先導する時が来ています。

IBDPとは？

国際バカロレア（IB）とは、帰国子女等、親の職業の関係等で国を超えて進学する子どもたちが、継続的に学習できるように、特定の国の教育政策に偏らない大学進学用の国際統一カリキュラムとして、スイスに本拠地がある非営利法人国際バカロレア機構が提供する教育プログラムです。ディプロマプログラム（DP）は、大学入学前の2年間に対応するもので、日本でも文部科学省が、2018年までに導入校を200校まで増やすという目標を掲げています。

立命館高校IBコースでは、IBDPの3つの中核——TOK (Theory of Knowledge / 知識の理論)、CAS (Creativity, Action, Service / 創造性・活動・奉仕)、EYU (Extended Essay / 課題論文) 及び6つの科目群を通して全人的な教育を行い、探究心や進取の精神を育成しています。また、国語を除く全科目の授業を英語で実施しています。

CASとは？

IBDPの中核のひとつであるCASは、「創造性」「活動」「奉仕」の3つの要素で構成されたプログラム

IBコースの可能性

立命館宇治高等学校では、IBコースの生徒は、1学年25人。CASコーディネーターと呼ばれる教員が、アドバイザーとして、それぞれ2〜3人の生徒を受け持ち、活動の進行をチェックしています。